

## 〈再 録〉

Comparison of natural durability of wood by stake tests  
followed by survival analysis

## 杭試験と生存時間分析による木材の素材耐久性の比較

Ikuo Momohara\*<sup>1</sup>, Sakai Haruko, Hiroshi Kurisaki\*<sup>2</sup>, Wakako Ohmura\*<sup>1</sup>,  
Toshikazu Kakutani\*<sup>3</sup>, Tokio Sekizawa\*<sup>4</sup> and Yuji Imamura\*<sup>5</sup>桃原 郁夫\*<sup>1</sup>・酒井 温子・栗崎 宏\*<sup>2</sup>・大村 和香子\*<sup>1</sup>・  
角谷 俊和\*<sup>3</sup>・関澤 外喜夫\*<sup>4</sup>・今村 祐嗣\*<sup>5</sup>

Journal of Wood Science 67:44 (2021)

木材の素材に対する野外耐久性の調査は、日本では、JIS K 1571「木材保存剤—性能基準及びその試験方法」5.2防腐性能5.2.3野外試験に準じて、実施されることが多い。すなわち、長さ600mmの杭試験体10本を半分の長さまで地中に埋め込み、年に1回以上引き抜いて、頭部、地際部及び地下部における被害状況を0～5の6段階で評価し、平均値が2.5に達した時の経過期間を耐用年数とする。そして、この耐用年数を基準に耐久性を区分することが多い。

しかし、同一樹種の杭試験体でも、腐朽が早期に進行し腐れ折れにより試験が継続できなくなるものから、なかなか腐らず調査期間が長いものまで、個体差もあり、上記で説明した耐用年数だけでは、樹種間で耐久性に有意差があるかどうか等、判定に苦慮する場合があった。

そこで、今回、奈良県森林技術センター明日香実験林等で行った杭試験の結果を、生存時間分析を用いて解析する手法を開発することにより、素材耐久性の樹種間の違いや試験地間の腐朽速度の違いなどを、科学的信頼性を向上させて示すことができた。

キーワード：素材（無処理木材）、野外耐久性、杭試験、生存時間分析

\*<sup>1</sup>国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所\*<sup>2</sup>富山県農林水産総合技術センター 木材研究所\*<sup>3</sup>兼松サステック株式会社 \*<sup>4</sup>日本木材防腐工業組合 \*<sup>5</sup>京都大学名誉教授